（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	井上　嘉孝
論文題目	異形イメージに関する心理臨床学的研究　―ひとつの夢を理解する試み―		

（論文内容の要旨）

本研究は心理療法で語られた一つの夢を分析する試みである。そのために、夢の中で鍵となった吸血鬼という異形のイメージが研究され、こころの歴史が明らかにされる。それを元に、最後に夢に戻って、分析がなされるという構造になっている。

序章では本研究の素材となる夢の事例が提示され、第Ⅰ章では一つの夢に基づいた事例研究という方法の意義と、異形イメージを捉える際の方法論的検討が行われた。

個人的な過去に還元できないイメージに接近する場合、ユングJung, C. G.はそのイメージの普遍的・神話的文脈を示す拡充法amplificationを勧めており、本研究もそれに沿っている。しかし拡充法は、夢のイメージから離れた知識の羅列になったり、またイメージを無時間的で非歴史的なものとして扱ったりする傾向がある。

それに対して本研究ではまず吸血鬼イメージの拡充過程と夢の解釈が別々に取り扱われた。拡充にあたっては吸血鬼イメージを歴史的に捉えることで、吸血鬼の現代的意味が明らかにされた。イメージの拡充過程と解釈過程を独立させる本研究の構造は、ギーゲリッヒGiegerich, W.によるイメージへの内在的アプローチという方法に従っている。つまり、吸血鬼イメージに対する知識も、夢イメージのなかに内包されている意味に沿う限り取り上げて、できる限り内在的に解釈していく方法である。

第Ⅱ章から吸血鬼イメージの拡充が行われた。吸血鬼像は18世紀東欧の民間伝承における「近親者を襲う生ける死体」として登場する。そこではキリスト教の文脈のなかで、歴史的・文化的に形成されてきた人工的で「自然に反するもの」としての吸血鬼イメージの姿がみとめられた。また、より自然で深層的なこころの働きと関係したものとして昔話と神話的世界における吸血鬼イメージが民間説話分類などに基づいて取り上げられた。こうした原-吸血鬼まで含めて考えるとき、吸血鬼は神話的な存在に基づきつつも、歴史的なイメージであることが明らかにされた。

第Ⅲ章では19世紀以降のフィクション化された吸血鬼イメージ、とりわけ20世紀におけるドラキュラ像が「グロテスクな怪物」「魅惑的な敵役」「物語の主人公」という三つの段階で変遷としていくのが示された。その最後の段階における「内省する吸血鬼」のイメージが、映画『インタビューウィズヴァンパイア』の検討を通じて、現代意識が抱える外部性の欠如を映し出しているものとして解釈された。吸血鬼イメージは恐れられる存在から共感される存在へと変化し、その立場も彼岸から此岸へと移動してきたことが明らかにされた。

第Ⅳ章では、本来西洋文化に根ざした吸血鬼が日本で見せた展開が分析され、吸血鬼フィクションの世界構造として「平行型」「衝突型」「均衡型」という三つのタイプに分けられ、そこに見られる吸血鬼と人間の関係において「結合」を巡る葛藤があることが明らかにされた。吸血鬼は今や恐れられるのではなく、人間から愛される存

（続紙　２　）

在になっている。それは「吸血鬼の死」として捉えられ、「吸血鬼との別れられなさ」が現代の心理学的な課題として考察された。

第Ｖ章では、こうした吸血鬼イメージの歴史的変化の意味を読み解くために、古代から現代に至るこころの歴史的文脈がまとめられ、外的で超越的な実体あるいは異界が消滅し、人間のこころの内面へと取り込まれていく過程が検討された。またこうした考察を通じて、現代における「内省する吸血鬼」とは、自らの存在の起源や、それを担保してくれる他者を求めるが、外部にそれを決して見出すことのできないイメージとして捉えなおされた。

第Ⅵ章では、吸血鬼が渇望する血のイメージと、その現代的なエッセンスである遺伝子のイメージが存在の根源を示すイメージとして捉えられ、歴史的・心理学的に検討された。現代における血液とは意識の変化にともなって物質化され、内面化された生命の流れであり、それがより先鋭化されたかたちで、さらなるエッセンスとして表現されているのが「遺伝子」であるとされた。そして私たちは遺伝子というイメージに集合的で異形の「途方もない重荷」を抱えていることが指摘された。

イメージの拡充過程を踏まえて、第Ⅶ章では最初の「吸血鬼の夢」を理解することが試みられ、夢のイメージの流れに添って、以下のように解釈された。まず家族が温泉に浸かるとともに、〈私〉は父親が吸血鬼に変わる姿に出会った。それは慣れ親しんだ世界に裂け目が生じ、関係が分化した瞬間であり、夢自我＝〈私〉にとって悲劇であると同時に達成でもあると考えられた。やがて吸血鬼から逃げた〈私〉は、山中の吸血鬼の屋敷に入り込んでいった。ここでは逃げることが同時に本質へと飛び込むことになっていて、それは現実逃避ではなく、〈私〉の現実へとより深く入っていく逆説的な動きとして理解された。この夢のなかでは、恐ろしいものから、人間を引き寄せ、やがて実体を失っていくという吸血鬼イメージの歴史的変化とパラレルな過程がみとめられ、イメージの変容過程には〈私〉の行為が大きく関与していた。しかし、現代的な吸血鬼イメージに示されたような人間と吸血鬼の共感や恋愛はそこには見られず、あくまで〈私〉は吸血鬼と戦い続け、ときにそれが無意味であることを知りながらも、吸血鬼イメージを前にして自らに課せられた行為を果たしていった。この夢を通じて〈私〉が成し遂げていたのは、イメージの変容であると同時に〈私〉の変容でもある弁証法的な過程であり、自らによる自らの根拠の創設ともいうべき行為であるということが示された。

以上の考察から、ひとつの夢にあらわれる個人的なイメージが集合的なイメージやその歴史的過程と対応関係にあること、さらに両者はただパラレルな対応関係をもつだけでなく、個人的なイメージとのかかわりは集合的なテーマを超えていく可能性を持っているということが示された。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

臨床心理学の方法論には、大きく分けて統計なども用いる調査研究と事例研究とがある。それに加えて、文献学的なテキスト解釈という方法もある。そのなかで本研究は、ユング心理学のなかのギーゲリッヒ（Giegerich）の方法に従って、心理療法におけるただ一つの夢を内在的に理解しようとしている。これは心理療法の流れを追っていく従来の事例研究では、物語に流されて見落とされる可能性がある個々のイメージの持つ深みやインパクトを、心理学的に捉えようというもので、これまでのパラダイムを超えていく試みとして評価できる。

一つの夢を明らかにしていくために、夢の中で繰り返し登場する吸血鬼という異形のイメージに焦点が当てられる。これまでも精神分析やユング心理学では、あるイメージや神話的な像について、その象徴的意味を明らかにする研究が多くなされてきた。特にユング心理学では、拡充（amplification）という方法によってイメージの様々な象徴性が捉えられるけれども、情報の羅列や当てはめに終わったり、またイメージの歴史性が考慮されていなかったりという欠点がしばしば見られた。それに対して本研究は、一度明らかにされた象徴性を、当該の夢を明らかにする際に留保することで当てはめを避け、またイメージの歴史性を考慮しているところが優れている。特にイメージの歴史性に関しては、吸血鬼が必ずしも普遍的に太古から存在するものではなくて、非常に歴史的なイメージであったこともあって、本研究を興味深いものにしている。

第Ⅱ章の吸血鬼についての文献的・歴史的検証が示したように、神話的には人食いなどのイメージはあっても、吸血鬼というイメージは主に18世紀の東欧における民間伝承で発生したという指摘は非常に興味深い。それらの民間伝承では、死者が肉親や生前の関係者の血を吸うことによって生き生きとした姿を保っていて、発覚後に焼かれなどとして、著者も指摘するように生と死の境界が決定的に作られる。このように吸血鬼が境界領域に関係するからこそ、吸血鬼は18世紀という前近代と近代、東欧というキリスト教世界と非キリスト教世界というまさに境界に生じてきたと考えられる。

第Ⅲ章では、前章の18世紀の東欧における民間伝承の分析を受けて、吸血鬼のイメージが19世紀以降においてフィクション化されたドラキュラの物語が中心になっていくのが考察の対象となる。そのドラキュラの物語の分析において、ドラキュラ像が最初には「グロテスクな怪物」、次には「魅惑的な敵役」、さらには「物語の主人公」という三つの段階で変遷していくという指摘は非常に興味深い。とくに最後の段階になって、映画『インタビューウィズヴァンパイア』の詳細な分析から明らかになったように、ドラキュラは自分の存在や行動に苦悩する「内省する吸血鬼」になっていく。ドラキュラという吸血鬼イメージは初期の恐れられる存在から共感される存在へと変化し、その立場も彼岸から此岸へと移動してくるが、最後の内省する吸血鬼は、恐怖にしろ恋愛にしろ、これまで対象であり、実体であった吸血鬼が、著者が「物語の主人公」とするように、主体になるプロセスを示していると考えられ、非常に興味深い変容が比較分析によって明らかにされた。これはドラキュラ像の変遷にとどまらず、著者も指摘しているように、人間のこころの歴史的変遷を映し出しているように思われ、非常に重要な考察であると考えられ、高く評価

（続紙　４　）

できる。
　第Ⅳ章は、マンガなどの日本のフィクションに持ち込まれた吸血鬼イメージの特徴を扱っている。「平行型」「衝突型」「均衡型」の3つのタイプが区別されているように、西洋において吸血鬼が人間に接近してくるのに対して、日本においては区別が保たれているのが興味深い。また著者も指摘しているように「衝突型」においても対立する世界の内容があまり明らかではなくて、区別が非常に形式的であるのも、現代の心性との関連が示唆される。
　第Ｖ章は、やや壮大過ぎる感もあるが、吸血鬼の分析から明らかになってきたこころの歴史性を、外的で超越的な彼岸の世界が、人間のこころの内面性へと吸収されていく過程を検討したものである。
　このようにして明らかにされた吸血鬼イメージの持つ深みや歴史性を背景におきつつ、最後の第Ⅶ章では、最初の夢に戻って、その夢を理解する試みがなされる。恐ろしいものから、人間を引き寄せ、やがて実体を失っていくという吸血鬼イメージの歴史的変化とパラレルな過程がこの夢のなかで認められるという指摘や、夢の細部において、夢の中の＜私＞は逃げるけれども、吸血鬼は別に追いかけてもこないという著者の気づきは興味深いものであり、一つの夢を出発点にしつつ、その背景を探る大きな回り道を経た研究は、創造的な成果をもたらしたものとして高く評価された。
　試問においては、なぜ「異形」というくくりにしたのかという質問があり、むしろ吸血鬼イメージに絞った論文にした方が、著者による鋭い発見が際立ち、よりシャープな論文になったかもしれない。『インタビューウィズヴァンパイア』を、著者は内省する意識として分析しているけれども、映画には記者としての視点があり、内省は純粋の内省ではなくて、むしろ移植された内省と考えられ、その意味で近年の発達障害や心理療法が示すように、内省という意識は既に過ぎ去ったことをこの映画は示しているのではという指摘があった。さらに結末部の夢の解釈で、むしろクライエントは、救わねばならない対象を必要としており、その意味で、彼女自身が彼らの生き血を吸う吸血鬼で永遠にあり続けるというループにまっているのであって、そこから抜け出すことが大切なのではという指摘があった。
　しかしこれらの問題点の指摘は、非常に豊かで興味深い成果を生み出した本研究の分析のさらなる展開と深化を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。
よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。
　また、平成２４年　　２月２２日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

　論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。
　要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降